

**佐保台小学校5年生 田植実習・報告**  
**松本武彦**

6月9日(木)、恒例の佐保台小学校5年生児童による田植えが行われました。

二人の先生に引率された児童23名は、予定より30分早い9時半に里山に到着。「午後から雨」の予報に、予定を繰り上げたとか。屈託のない子どもたちの声が新緑の谷間に響き、里山に賑わいと華やぎを演出しました。

直ちに開会セレモニーが行われ、鈴木会長の歓迎の言葉を受けて、子どもたち代表の二人が「よろしくお願いします。」と言葉を述べ、早速田に向かいました。

田では、田植えについての簡単な説明を聞いた後、それぞれに割り当てられた区画で初めての田植えに挑みました。

田の中の様子が分からず恐る恐る田に足を入れる子、サンダルのまま田に入ってしまう身動きの



とれない子、泥に足を取られてバランスを崩す子など、子供たちにとっては、田の泥との戦いが田植えの第一歩だったようです。

しかし、尻餅をついても泥まみれになっても、たとえ時間はかかっても、みんなが持ち分を植えきり、田2枚を見事黄緑色に仕上げました。

そして最後に、田の神に花を手向け、全員で順調な生育と豊作を祈願しました。秋には「子どもたちの黒米」が食膳を飾って呉れることでしょうか。子どもたちに混じって田植えをした会員の方々の顔もほころび、爽やかな風が水面を揺らしました。



「田植え」。ここから子どもたちはどんなことを学んでくれたのでしょうか。それがたとえ些細なことであっても、彼らのよき思い出となり成長の糧となることを期待して止みません。

**鳥シリーズ 7月号 小田久美子**  
**「探鳥」と「バードウォッチング」**

日本で「鳥」と云えば焼き鳥にして食べるか、せいぜい鳥籠に入れて飼うという発想しかなく、鳥を見て楽しむなどと云ったら変人扱いされた時代の1934(S9)年、中西悟堂によって創設された日本野鳥の会は、その後もなかなか認知されなかったようです。「野鳥」「探鳥」は悟堂の造語ですが、会報「野鳥」は「のどり」と読まれ、S40年代でも「探鳥会」の開催掲示には、鳥の部分が女に直され「探女会」なら分かるけどなどと言われた。口の悪い友人などには、ピーピング・クラブ「覗き見クラブ」と通称され、貴重な双眼鏡も覗く道具としか見られなかったという話も聞きます。

野鳥の会が広く知られるようになったのはご存知のように「紅白歌合戦」でのカウントダウンです。



その頃から「バードウォッチング」と共に、双眼鏡を持ち歩いても「良いご趣味ですね」と云われるようになりましたが、今でもスコープ(望遠鏡)を担いで歩くと「写真ですか?」「え!見るだけ!!」まだまだだなあと、寂しい思いをします。

「バードウォッチング」という外来語の方が先に認知度が高くなりました。バード(鳥)をウォッチング(見る)。確かに。それだけでしょうか。

云うまでもなく、鳥は盛んに声を発し多くは美しい囀りを持ちます。目で「見る」ことだけではなく耳で「聞く」も十分に働かせて、環境も体感し楽しむ。時には双眼鏡などに頼らず、肉眼であるがままにウォッチングすることも大切なのではないのでしょうか。こうしてみると、「探鳥」というちょっと古めかしい言葉が一番適当な感じがして来るではありませんか。「探鳥」とは見るだけではなく、鳴き声を聞き、鳥を捜して求めるという意味なのです。中西悟堂の造語の妙をあらためて感じる今日この頃です。